

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部2年

氏 名: 大山 那帆

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅北道全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>私は、この研修を通して、外国とはどういうものなのか、異文化理解とはどういったことを学んだ。今回の研修では韓国という私たちにとって距離がより縮まっている国に滞在した。しかし、韓国といっても有名なソウルやプサンでなく、二つの大きな都市から離れた、全州市に滞在したことで得たことは多かったと思う。大きく三つにまとめて報告する。まず、一つ目に、私の中での「日本文化」の見方が変わった。いままで、外国に赴いたことが無く、日本の文化の中で暮らしてきた。しかし、今回の実習で短い期間ながらも、「韓国の文化」にふれ、比較対象ができたと思う。韓国には私から見ると不思議なものや人々の行動があった。私たちが普段やっている「当たり前」が、韓国にいて「日本文化」として浮き彫りになったような気がした。外国の人々に囲まれていることで、どれだけ自分に「日本文化」に染まっているのかも実感した。内側からでは、決して気づくことのできない「日本文化に気づく」ことができた。二つ目に、外国語の楽しさである。私は、一年次から初修外国語として韓国語を学んできた。今回の実習を通して、「出来るだけ韓国語で話してみよう」「出来るだけ韓国語を読んでみよう」と自身で目標を立てていた。世話をしてくれた全北大学の生徒と、日本語と韓国語の両方を織り交ぜながら会話しているとき、もっと韓国語を勉強して、もっと分かり合いたいと強く感じた。しかし、言語を通さずとも分かり合うことも多かったため、「ボディランゲージ」という音声のない言葉にも興味がわいた。外国語を学ぶことによってより多くの人と考えや心を交わすことができることに感動した。ぜひこれからも韓国語の勉強を続けていきたいと考えている。三つ目に、ステレオタイプをもつと異文化理解は深まらないという事だ。このことが一番大きかったように思う。実習前の韓国に対してのイメージは、悪いものばかりではなかったが、やはり日本人よりは冷淡である人が多いだろうという考えがあった。しかし、そのようなことは無かった。むしろ、助けてくれたし親身になってくれた人が多かった。決めつけてしまうことがどれだけ私たちを本当の姿を理解することから遠ざけるか考えさせられた。また、「私たちは日本人だからこういう事は得意でない」という考えも同様である。まずはやってみることが重要であって、そこから生まれた結果を見つめることこそ異文化理解に対する姿勢なのだと思える。今回の研修は、一週間という短い期間であったが、考え方の変化に大きく影響し、新しい視点を獲得できたように思う。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回の研修後は、上記したが、韓国語の勉強を継続したい。さらに、全北大学への留学も考えている。もし、留学することができたら、韓国語の上達だけでなく、短期滞在では気づくことのできない部分を見たい。そして、今回の実習でつかんだ異文化理解の視点のポイントを利用し、これから勉強したいと考えている文化人類学の研究に活かしていきたい。「観光」でなく「実習」という形でしか得ることができない、「研究手法の体験」も大いに役に立つと考えられる。また、鹿児島大学に訪れる外国人留学生に積極的に関わり、自分の異文化体験の見解を深めたいと思う。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部人文学科 2年

氏 名: 塚田 梨子

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅북도全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>私はこの実習で「日本と韓国の1人ご飯」について調査した。韓国に行く前にグループで立てた仮説は、韓国人は1人でご飯を食べに行く人が日本人よりも少なく、誰かとご飯を食べることを大切にしているのではないかというものだ。このテーマを元に韓国では全北大学の学生に協力してもらいながら多くの飲食店で観察調査を行い、それに加えてアンケート調査とインタビュー調査も行った。まず、私たちの班は観察をしに行く飲食店を決める際、韓国料理についても知る必要があり、インターネットの情報だけでなく韓国の学生の方々の意見を参考に飲食店を決めていった。そして、観察中に気づいたこととして韓国で訪れたファーストフード店にも1階にカウンター席が配置されていたがそれらの席は食べる時にはほとんど使用されずに、テイクアウトの商品を待つ間に座るだけの席として使用されていた。観察の結果は、1人でご飯を食べている人は日本よりも少なかった。しかしながら、観察調査とアンケート調査が進んで行くにつれて、2つの調査結果に差が出来ていることに気づいた。観察調査では1人でご飯を食べている人は少なかったのに対して、アンケート調査では、1人でご飯を食べに行けるという回答が食べに行けない人よりも多かったのだ。これらの結果から、私たちのアンケート調査の質問の仕方に問題があることが分かり、インタビュー調査も追加で行うことにした。最初にイム先生にインタビューさせて頂いたのだが、初めて知ることがほとんどで印象的であった。インタビューでは現代における1人ご飯だけでなく昔の韓国の食事の文化なども知ることが出来た。わたしたちが観察中に見たカウンター席も最近になって増え始め、テーブルも小さくなって1人でもご飯を食べにいける環境が出来はじめているようだ。今回の実習では韓国での1人ご飯の考え方を学べただけでなく、食文化も知ることが出来た。そして、初めての調査であったが、調査それぞれに大変な部分があり、改善していかなければならないと思った。そして、約1週間の間韓国の学生と共に行動してコミュニケーションの大切さも学び、実際に多くコミュニケーションを取ることも出来た。韓国の学生が日本に来たとき、私たちも調査に協力したが、韓国ではそれ以上に私たちの調査を手伝ってもらい、韓国の学生の方々がいたからわたしたちの現地調査も無事終えることが出来たと思っている。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>韓国での調査は無事終えることが出来たが、韓国で新たに知ることが多く、日本でもまた追加で調査を行わなければならないと考えている。その追加調査中には今回日本と韓国で1人でご飯を食べに行きやすい飲食店との共通点なども調査していきたい。そして、調査をしていく上でどの観点から「日本と韓国の1人ご飯」を明らかにしていくかが曖昧であった為、その部分も先生方からのアドバイスや結果を元に再度まとめながら考えていこうと思っている。今回の実習中に経験した調査の過程で困難だったことは次調査していく時には改善していければ良い。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部 2年

氏 名: 中野 杏香

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅北道全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>この研修を通じて、私は初めて外国人を対象とした調査をすることが出来ました。まず、日本人に対してでもインタビューやアンケートを行うことは大変ですが、言語や概念の異なる外国人への調査はもっと難しいということを実感しました。私たちのグループは、儒教のなかの尊敬・長男重視について調査を行いました。このテーマについて調査をしていくなかで、尊敬・長男に対する日本と韓国の概念の違いという問題が生じました。しかし、調査日数は決まっているため、問題が生じたからといってそこでとどまっているべきではなく、問題に柔軟に対応することが重要だとわかりました。さらに、調査を行っていく中で、私たちの儒教・尊敬の概念が固まっていなかったということが明らかになりました。これは、研修に行く前にもっとしっかりと固めて行くべきだったと感じました。そして、アンケートやインタビューにおいて、数ばかりにこだわりすぎていたかもしれないと感じました。特にインタビューは、もっと一人一人の考えをしっかりと聞くことができるような質問を作っていくべきだったと思いました。</p> <p>調査後には、パワーポイントを作り、調査報告会を行いました。パワーポイントは、短時間で作成しなければならなかったのですが、情報量が多すぎてまとまりのないパワーポイントになってしまいました。もっと要点をしぼって、わかりやすく理解しやすいパワーポイントを作ることが出来ればよかったと感じました。</p> <p>今回の研修は、韓国で行われましたが、私たちは韓国語が話せないため、韓国人の学生に常にサポートをしてもらいながら調査を行いました。日本に居る時に質問内容の翻訳は行っていたのですが、いざ話すとなると難しく、韓国人学生に翻訳をお願いしていました。初めは、インタビューは100人の予定でしたが、韓国語が話せず、理解できないため、一つ一つ翻訳をお願いしなければならないということを考えて、50人に変更しました。韓国人学生のおかげで何とか50人という目標は達成できましたが、今回の研修は、韓国人学生の支え無しでは全く進めていくことが出来なかったと思います。</p> <p>調査の結果、アンケートは200人、インタビューは50人集めることが出来ました。そして、参考書で読んだような意見を持っている韓国人はあまりおらず、時代とともに考えが変化してきているということがわかりました。尊敬は、多くの部分が時代とともにきてきていますが、敬語というものはいまでも残っているのだとわかりました。韓国人は、多くの人が出会ってすぐに年齢を聞くという習慣があるそうですが、これも敬語に関係しているのではないかと考えました。さらに、私たち日本人が考えている韓国人の儒教というものが軍隊によって作りだされているミリタリーカルチャーから来ているのではないかという意見もありました。</p> <p>〔研修後の抱負〕</p> <p>研修では、たくさんのデータを集めることが出来ました。しかし、韓国での報告会ではそのデータをまとめることが出来ませんでした。これからの授業のなかでしっかりとまとめて行きたいと感じました。そして自分達の研修のテーマについて理解を深めていきたいと思えます。今回の研修で、事前に準備していくことがどれほど大切かということがわかりました。今後、調査をする際には今回の研修で学んだことを活かして、もっと有意義に調査ができるようにしていきたいと思えます。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部 2年

氏 名: 中村 葵

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅북도全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修において私の所属する班は「日韓大学生の学習における相違点」というテーマで調査を行いました。</p> <p>韓国へ行く前に、日本人大学生にグーグルフォームで作成したアンケートをスマートフォンやパソコン等の機器から回答してもらい、韓国ではそれを韓国語に翻訳したものを韓国人大学生に回答してもらいました。その後、より詳しい情報を得るために、追加調査として学生へのインタビューと全北大学校の日本語学科の先生へのインタビュー、大学図書館の設備見学、その利用者の計測を行いました。</p> <p>現在までに調査で得た結果としては、日韓大学生の普段の勉強時間に大きな差はないが、テスト勉強は韓国人大学生のほうがより早く始めること、その理由として、韓国の授業の成績がほとんど相対評価であること、就職の際に企業に大学の成績(GPA)を提出することが挙げられることが分かりました。また、日本では良い成績を取ろうするのは単位のためという人が、韓国では就職を有利にするためという人が圧倒的に多いことが分かりました。</p> <p>この研修を通じて得た成果は多くあります。まず、このように時間をかけて調査を行うということ自体が自分にとっては初めてであったため、上手いかなかった部分から学ぶことがありました。テーマ決めに多く時間を取られたこと、アンケートやインタビュー項目に不備があったことなどが挙げられます。これらは、事前準備に時間がかかることを知っておき、案を多く考えておくこと、推敲・訂正を細かくそして多く行う必要があることを学べたので、次の調査に確実に活かすことのできる良い知識になったと思います。</p> <p>そして今回は日本と韓国という異なる二国間の間で調査を行うことができる貴重な機会であったのですが、その点で学んだことも多くあります。複数の国を対象とする調査においては、国の間で常識やマナーが異なることがほとんどであるため、その点を最初から考慮しておかないと調査につまずくことがあることは承知していましたが、その点を考慮して対象国の常識等を事前に調べたとしても、それが間違っただけのもの、古い情報である可能性があるということが分かりました。そしてそのような予測していなかった事態が起きた際に、臨機応変に計画を変更することは大変難しいということも身をもって体験し、学ぶことが出来ました。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>現地での調査は終わりましたが、学生へのインタビュー、図書館の設備見学と利用者の計測は日本ではまだ行っていませんので、行う必要があります。その部分において、不備がないように行うことを目標としたいと思います。また、今回海外で調査するという貴重な経験をすることが出来ましたが、今回得たものを海外だけでなく日本でも、次回調査を行う際に活かしたいと思います。</p> <p>今回韓国で調査をするにあたって、全北大学校の学生さんたちにとっても助けられました。調査で得た結果だけでなく、友人との交流を続けることも、大切にしたいと思います。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部 2年

氏 名: 中村 日佳里

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅北道全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私たちのグループは日韓での1人飯の実態と意識の比較をテーマに、飲食店での観察調査と大学生へのアンケート調査、インタビュー調査を日韓それぞれで実施した。このように今回初めて、文化の差異が大きい国外を比較対象として、文化人類学のフィールドワークを行ったことによって学んだことが3つある。</p> <p>まず1つめに、前提に違いがあるということへの気づきである。特に、観察調査では、日本の「ファミレス」が、韓国ではかなり様式の違うものであるという、前提となる部分での問題が発生した。そこで、価格帯、カウンター席の有無等の制約をつけ比較対象の設定を行ったが、比較対象の対称性に疑問が残った。また、他の比較する飲食店の設定も非常に悩ましく時間を割いた。最後の教員からのアドバイスにあったように、比較対象を立て、2つで比較する方法には無理があった。このように、日本の前提をそのまま違うフィールドに持ち込み、当てはめようとするべきではないということ、また、異文化において比較するということの難しさも感じた。</p> <p>2つめに、文化、感覚の違いを捉える難しさである。どのような調査方法をとるかはもちろん、その調査の中でどのような質問項目を作り、アプローチするかなど、日本での事前調査の時点でも非常に行き詰っていた。1人飯が「できる」のと、実際に1人飯を「する」のとの違いや、アンケート調査で得られた結果にみられるグラデーションを、どう説明していくのかという点が非常に難しかった。さらに、韓国の大学生を対象としたアンケートの作成では、異文化がフィルターにならないように「どう伝えるか」「どう理解するか」といった問題も加わり、アンケート調査は困難を極めた。最終的に、アンケートの結果をまとめてみても、日韓で行った観察調査の結果との間にかかなり大きなずれが見られ、アンケート調査の「どう伝えるか」という点での不備が露呈した。このような結果のずれを受けて、今回の調査では急遽、インタビュー調査を追加するなど試行錯誤しながらの調査であった。</p> <p>3つめに、言語能力の必要性である。これは上記の文化、感覚の違いにも関係してくる。細かいニュアンス、感覚的なものを伝えること、理解するためには、高度な言語能力が必須になってくるということを痛感した。今回は、全州大学の日本語学科の学生にサポートについていただいたため、調査ができたが、彼らがいなければ調査どころではなかったと思う。このように、海外でフィールドワークを行っていく上では、1つのツールとして調査に使うことができるレベルの高度な言語能力が必要であるということを実感した。</p> <p>まとめとして、今回の海外という文化の差異が大きい環境で、調査は、様々なことに気づき、</p> <p>〔研修後の抱負〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回の研究テーマについての抱負 まず、韓国での調査の中で、比較対象の再検討がなされたため、日本での補足調査が必要になった。研修後も追加調査と結果のさらなる考察を怠らず、今後のための報告書作成まで力を尽くしたいと思う。 ・これからの学習についての抱負 今回、韓国へ調査に出向き、文化の差異が比較的はっきりしている環境の中に身を置くことができた。しかし、これからは国外と比較するようなことはなかなかできないと考えられる。だからこそ、今回、文化の差異が大きかったからこそ感じる事ができた異なるフィールドで調査を行う際の課題設定の仕方や意識の違いをどう扱っていくのか等のポイントを、文化の差が小さい地域でも応用させていくことが、何かしらの発見・気づきのカギになると思う。今回、学んだことをこれからの学習に活かしていきたい。 <p>また、今回の調査では、比較対象の設定やそもそもの比較方法、調査方法等の不備、不適切さ、さらに、事前調査の不足などの反省点が挙げられた。決められた少ない日数の中で結果を得るために、今回の失敗を次に活かしていきたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部 2年

氏 名: 野間 優希乃

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅북도全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>私は、今回の実習で、韓国の儒教が若者の価値観にどのように根付いているのかということ調査した。調査の結果としては、尊敬の念を表すのは敬語であると考え傾向にあるが、以前は服装や行動規範で示されることが多く、現代まで残っているのが言葉である敬語であったということ、韓国の方も感じている儒教の薄れというのは、軍人国家の形成のためにミリタリーカルチャーが儒教を名乗った思想が世間に広まり、現代は軍人国家と儒教の分離が起こっているの薄れてきていると感じてしまうことが分かった。日本での事前学習で韓国の儒教について論文などで勉強し、考察した結果、儒教の中でも男性重視と尊敬を重視することにした。しかし、調査を進める中で、韓国の生徒側から儒教を見るためにはもっと広い人間関係(親と子、上司と部下、教師と生徒など)について調査するべきだという意見をいただいて、日常の中で焦点を当てるべきところがズレていたことが分かり、自分たちでは正しいと感じていても、気づけていない部分があったので第三者の意見の重要性を実感し、これから調査を続けていくうえでどのように改善すべきかを考える大きなヒントとなった。また、調査を行う上で日本語で翻訳可能な韓国語であっても、その用語の概念が異なっていたり、使い方が人によって様々であったりと、翻訳できるからといって全く同じ意味とは限らないということをもっと実感できたことも収穫の一つであったと考える。加えて、韓国では、街で宗教勧誘などが多いため、調査と説明しても怪しまれることがあり、インタビューやアンケートをお願いしたことで不快に感じさせてしまったことがあり、調査を行う場所も日本を前提に考えるのではなく、国の文化や習慣によって考えるべきだと学んだ。日本の自明であることが、海外では自明でないという理解できていても、単語の概念が異なっていたり、調査場所が適していなかったりと思わぬところでの躓きや新たな気づきがあり、外に出たからこそ母国について知ることができるのだと改めて思った。今回の調査は、我々は通訳も含め韓国側の学生に頼ってしまうことが多かったが、韓国の学生が日本で調査を行ったときにできる限りの協力をしていたので、困難が生じたときに全力で助けてくれて、調査を続けることができた。当たり前なことではあるが、国籍に関わらず、良い意味でも悪い意味でも人間関係はコミュニケーションの延長であるということが分かり、今回のようなグループ実習であればなおさら、調査内容だけではなく人間関係も大切にすべきだと感じた。これから、日本でグループ活動をする際は、内容にばかり力を入れるのではなく、班員とのコミュニケーションもより大切にしていきたい。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今後は、広い人間関係を見るためにはどういう調査をすべきなのかを考える必要がある。例えば、教師と生徒の関係を見る場合、生徒が教師に敬語を使っていたとしてもそれは尊敬であると断言できないように、内面から出るものをみるためには、どのように調査すればよいのか調査方法を修正してゆきたい。また、調査の結果として、昔はミリタリーカルチャーに利用された儒教であったが、現代は分離しているという儒教と軍隊との関係性が明らかになったので、軍隊と儒教との結び付きがどのような社会背景から生まれ、社会に根付き、</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部 2年

氏 名: 野間 優希乃

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅北道全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
変化していったのかもさらに調査を進めていきたいと考える。	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部 2年

氏 名: 廣田 七菜子

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅북도全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私たちは8月26日から31日まで韓国、全州へと研修に行きました。私の班が調査テーマとして挙げたのは今の韓国に儒教の概念が根付いているのか、というものです。なぜこのテーマに至ったかという、韓国の親子間が日本に比べると非常に親密であるということが留学生の話などから分かり、その背景には儒教概念が何かしらの形で存在しているのではないかという考えに至りました。そこで文献調査を行ったところ「韓国の儒教観に変化がある」という記述が多くみられ、今の韓国の若者に儒教の概念が根付いているのか調査を行いました。調査の方法としてアンケートとインタビューを実施しました。アンケートは14項目の質問を作り、その内容は家族の中での長男の在り方など男性優位についての質問を挙げました。対象者は14～19歳の若者で200人程の解答を得られました。インタビューではアンケートの中から特に詳しく聞きたい問題を2問抜粋し、さらに新しく1問作成しました。目標人数は100人で男子50人女子50人と掲げましたが、現地に来て雨の影響もあり街中でのインタビュー調査が難航し、合計53人(男子26人・女子27人)にインタビューをしました。インタビューの中で気づいたことは、今の若者には文献に書いていたような儒教の概念が強く根付いていることは感じられないということでした。自分たちが予想していた結果とは違い、男性だから、女性だから、年上だからといった理由で普段の生活が成り立っているわけではないことがわかりました。またこの街頭インタビューとは別に長男インタビューも作成しました。全北大学の学生さんで、長男の立場である3人の方にインタビューを行いました。質問は3問挙げ、①長男としての損得を感じるか。②親と一緒に住むべきか。③祭祀は長男が中心になってやるべきか。という質問内容でした。結果として①は得より負担を感じる場面がある、②は親が望むならばすべき、長男ではなく余裕のある人が同居するべき。といった時代の変化により意見が分かれています。③は必ずしも長男だけではなく他の兄弟たちも協力してやるべきだと意見が一致しました。調査のまとめは、韓国と日本の長男の認識の違いがあり、これは少子化が進み長男としての意識が薄れてきているのではないかと考えました。インタビューをしてみて「今はそういう時代ではない」「儒教は心からでるもの」といった言葉が多くみられました。気づきや反省点として二国間と微妙なニュアンスの違いやアンケートで男女の比率を合わせるのが困難だったことが挙げられました。調査をしてみて、うまく機能しない質問や文化の違いから思っていた解答を得られなかったりなどハプニングは次々と起こりましたが、異文化の差異を肌で実感することができ、またそれと同時に</p> <p>〔研修後の抱負〕</p> <p>私はこの韓国実習に行く前から前期の授業で、調査に向けての準備をグループのメンバーと頑張ってきました。しかし、実際に現地に着き調査を行うと思わぬハプニングであったり予想していないことが起こったりなど現地に行って初めてわかることばかりで新鮮でした。調査結果からお年寄りへの尊敬に関する質問項目がうまく機能せずに思っていた解答を得られなかったため後期の授業では何がいけなかったのか再検討したいです。また微妙なニュアンスの違いにも対処できるよう、何らかの方法があったのではないかとということについても考えてみたいです。また韓国での長男の在り方ももう一度グループのメンバーと調べ、話し合い、日本とどう違うのか調査していきたいと思います。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部人文学科2年

氏 名: 前畑 美早季

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅북도全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回の研修で、我々の班は韓国の勉強と就職についてアンケートやインタビュー、さらに観察調査などを全北大学で行った。6日間の研修を通じて得た成果として、韓国人大学生の勉強に対する取り組みや意識・考えに関するデータから日本と違いがあることが分かった。また、全北大学の学生とたくさんコミュニケーションを取り、一緒に調査をすることで新たな発見や気づきがあり、異文化体験をすることができた。調査の具体的な内容としては、韓国の大学生を対象にアンケート調査を行い、その結果を日本で事前にとっていたアンケートの結果と比較したことで色々なことが見えてきた。まず、韓国と日本の大学生の共通点として普段の勉強時間が2時間以内までが圧倒的に割合が高く、それ以上勉強するという人の割合が低いということが挙げられる。一方で、テストのどのくらい前から勉強を始めるかという質問に対しては、日本の学生のデータでは3日前～1週間前と答えた人の割合が最も高かったのに対し、韓国の学生の回答では1週間前～2週間前と答えた人の割合が高かったという結果がでた。これらのことから、日本よりも韓国の学生の方がテストに力を注いでおり、それは成績システムの違いが関係しているということが考えられる。鹿児島大学では絶対評価を用いているのに対し、全北大学では相対評価を採用しているため、良い評価をもらうためには一定の割合の中に位置する必要がある。そのため、自然と競争率が上がり、良い成績を取るために早いうちからテスト勉強に取り組み始める傾向にあると考えられる。また、就職に関するアンケートでは親にいい企業に就職するように言われるかという項目で日本の学生は「いいえ」が約70%だったのに対し、韓国の学生は「はい」が約55%と逆の結果がでた。韓国では就職の時にGPAを相手の会社や企業に提出する必要があるがほとんどということを経験していたため、親の期待に応えるべく学生の頃に一生懸命に勉強し、よい成績をもらい、よい会社や企業に就職しようという考えを持つ傾向にあると考えられる。このように、アンケートから得た結果からも日韓の学生の勉強に関する様々な相違点が見えてきた。また、インタビューも行い、アンケートとは違う深い部分まで聞くことでよりリアルな考えを得ることができた。そして、調査をする過程で韓国の文化や習慣を実際に肌で感じる場面がいくつもあったが、ある意味カルチャーショックのような経験をできたおかげで、こういう文化や習慣を行う国もあるんだと理解できるようになり、視野が広がったよう</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>韓国での調査を行った結果、十分な数のデータを得ることができた。その比較対象とするために鹿児島大学で再びアンケートやインタビューを行う予定である。また、韓国で図書館の観察調査を行ったが、鹿児島大学ではまだ図書館の観察調査は行っていなかったため、今後の研究のために夏休みの終わりにグループで調査しようと考えている。韓国での研修で試行錯誤しながら得たデータや結果を無駄にすることなく、さらに研究を深めていけるよう追加調査やまとめを行っていきたい。また、最終的に作成する調査報告書で日韓の勉強と就職の違いを明確に示し、来年やその後の実習を行う学生に参考になるものを徹底して作り上げていきたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部人文学科 2年

氏 名: 松尾 一沙

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅北道全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の文化人類学実習における海外フィールドワークで、私の属する班では「日本と韓国における学習・就職の違い」について調査を行った。まず、調査に赴くまでの期間は、テーマ決めと調査内容をグループで話しあって決定した。私達の班は「韓国の大学生は日本の大学生に比べて勉強量が多い」と聞いたことがあり、その理由は韓国における就職の厳しさが影響しているためではないかと考えた。したがって、韓国と日本の学習と就職にどのような違いがあるのかを調べたいと思い、今回の調査のテーマが決定した。研修期間は8月26日から8月31日の6日間であったが、移動時間や報告会の時間などもあり、丸1日時間を割くことが可能な8月27日から8月29日の3日間で主な調査を行う計画を立てた。実際に全州市では、8月27日にアンケート調査・全北大学中央図書館の見学・利用者の調査を行い、8月28日にアンケート調査のまとめと計画の見直し、8月29日に全北大学の学生と日本学科の教師を対象にインタビュー調査を行った。アンケート調査での質問内容は、性別、生年、学年等の基本的な情報と、勉強に関することとして「大学の授業の予習復習のために一日何時間勉強するか」「勉強はどこで、いつ行うか」「テスト勉強はどれくらい前から始めるか」「勉強目的で図書館へ行く頻度」「資格試験の経験があるかどうか」「学習する理由は何か」という質問を立てた。就職に関する質問としては「いい企業につきたいと思うか」「親からいい企業につくように言われるか」「就職で重要視されると思うものは何か・それを意識して頑張っているか」「就職先に自分が求めるものは何か」というような項目をアンケートに取り入れた。日本でのアンケートを110人に回答してもらったことから、韓国でのアンケートは全北大学の学生の協力を得て100人以上の回答を得ることを目標にした。また日本語で作成したアンケートを韓国語に翻訳する作業は、ある程度韓国語の素養があるグループのメンバーが行い、韓国に渡る数日前までに、韓国人留学生や全北大学の学生に翻訳したアンケートを見てもらい、自分達がアンケートで質問したいことと回答者の答えに矛盾がないか、入念に確認した。アンケートは日韓両方ともGoogleフォームを使って回答を集めた。1日目の調査日である8月27日の夜の時点でアンケートの回答数は100を超え、2日目にアンケート結果のまとめ・見直しの作業を行ったところ、韓国の学生の方が日本の学生よりもテスト勉強を早く始める傾向にあることが分かった。また、学習する理由は何かを問う質問では、日本では「単位をとるため」という回答がほとんどであったのに対し韓国では「就職に有利にするため」という回答が多かったのが特徴的だった。加えて、就職で重要視されると思うものを問う質問では、多くの支持を得た回答が日本では「性格」であったのに対し、韓国では「GPA、資格」という項目であった。以上の結果から「韓国の学生がたくさん勉強している理由は、良い成績を取ることで就職に役立てるためなのではないか」という推測が得られたが、アンケートではこれ以上細かい内容を問うことが出来ないのではないかと考え、調査最終日に急遽インタビュー調査を行うこととなった。インタビューではまず、全北大学の日本語学科の教授であるイム先生に大学の制度の違いや韓国の就職事情についての話を伺った。韓国では大学のカリキュラムに「複数専攻」というものが入り入れられている。それは自分の専</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部人文学科 2年

氏 名: 松尾 一沙

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅北道全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
<p>門とする分野を深める授業の単位を取得して卒業単位とする「専攻深化」の他に、自分の専門分野と異なる分野の授業の単位を取得して卒業単位とすることが可能であり、それを「複数専攻」という。現在複数専攻を選ぶ学生が多数存在しており、その中でも商業や貿易など就職に役立つ分野の授業を選ぶ学生が多いという。また、最近では「猶予」という制度が成立し、卒業単位をすべて取得した後も最大半年間大学に在籍することができるというものである。その理由を先生に尋ねたところ、空白の時間を作らずに就職に向けての準備をするためだという解答をいただいた。また韓国の大学では日本の大学の成績評価の仕方と大きく異なる点があり、多くの授業で「相対評価」が用いられていることが分かった。日本の大学のような「絶対評価」はあまり取り入れていらず、さらにほとんどの授業でテストによる評価がされているということがわかった。では学校の勉強以外ではどのようなことを勉強しているのかと考え、インタビュー調査を何人かに行ったところ、1, 2年生は学校の勉強以外ではあまり学習をしないという答えが多く得られたが、3, 4年生になると学校の勉強以外にも就職に向けての資格試験を取るための勉強に取り組んでいる学生が多いことが分かった。以上の調査から、韓国の大学生の普段の勉強時間は日本とあまり変わらないが、テス</p>	
<p>[研修後の抱負]</p> <p>今回、韓国と日本の学習と就職の違いに対する調査を行う中で、大学生の意識の違いだけでなく韓国の教育事情や就職事情についての情報も得ることが出来た。その中で韓国の大学受験についてのお話も伺ったが、自分で事前にインターネットを用いて得た情報と合致するところだけでなく違うところも多々あり、現地の人から実際に得る情報の重要性を学ぶことが出来た。また、韓国の大学生とインタビューをする中で、思うように自分の言いたいことを伝えることが出来なかったり、情報をうまく共有できない場面などもあった。私は韓国語を勉強したことがほとんどなく、全北大学の日本語学科の学生に助けてもらうばかりであったので、異文化間でのフィールドワークには言葉の取得が欠かせないということを改めて実感した。またインタビューやアンケートを行う中で、質問の仕方や回答項目の作成の仕方にも十分な注意が必要だということを知った。後期以降の実習や授業では、今回の研修</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部人文学科 2年

氏 名: 室屋 ももこ

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅북도全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の実習で得た成果は、アンケート調査やインタビュー調査の特性をうまく利用する方法や失敗への対応の仕方を学んだ点、韓国での異文化経験である。</p> <p>今回の実習で、私たちの班は1人でご飯を食べるという行動について日韓での比較調査を行った。日本での事前調査では、1人でご飯を食べている人は日本より韓国の方が少ないと予想していた。しかし、実際に現地に行ってアンケート調査を進めていくと、予想していた結果が得られなかった。その理由を探ったところ、事前に用意していたアンケートの質問の仕方や言葉の使い方が適切ではなかったことが分かった。また、アンケート調査だけでは明確に結果が分からず、新たな疑問も浮かんだため、インタビュー調査も急遽行うことになった。これにより、さらに詳しい結果を得られたとともに、今後の調査について新たな課題を見つけることができた。このような経験を通して、目的にあった調査方法の選択の仕方、調査対象者に質問者の意図をうまく伝えるためには何が重要かということも学んだ。また、失敗や挫折をした時に臨機応変に対応する能力を身につけることも、今後の調査だけではなく、就職などの自身の今後の生活に重要であると分かった。今後の調査を円滑に進めていくためにも、今回身につけたことは最大限に生かすべきである。</p> <p>6日間の韓国での滞在や調査により、日韓との文化の違いも経験することができた。まず異文化として、言葉の違いが顕著であった。この実習では韓国の日本語学科の学生達との交流が主だったが、日本語が通じない場面も多くあった。私は韓国語を全く勉強していなかったため、母国語が通じないことにもどかしさを感じた。また、文化の違いによる言葉の種類の違いから、自分が伝えたいことを韓国語で伝えられない部分もあった。このような経験から、コミュニケーションをとる上での言語の重要性を理解し、言語を学ぶ意義を見出すことができた。また、調査を進めていく中で、日本と韓国には密接な関わりがあることを知った。韓国では、以前は同じ共同体の人々皆で食事をとることを重んじていたようだが、最近では1人でご飯を食べる人も増加してきたということが分かった。この1人で食べるという行為は、日本から伝わったものだという聞き、日韓での相互の関わりを目の当たりにした。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回の実習で、調査を進めていくための新たな課題を発見したため、日本ではこの課題解決に向けてさらに調査を進めていく予定である。その時に、以前の失敗を繰り返さないように、班のメンバーとの積極的な意見交換を行い、調査で至らない点をどのように補うかをきちんと話し合う必要がある。また、調査計画を練り、調査を進めていくごとに目的に沿った変更や対応をしていきたい。</p> <p>自身の課題として、語学を積極的に学んでいくことを定めた。前述した通り、今回の実習を通してコミュニケーションをとる上での言語の重要性に気づいた。自身の考えを率直に伝えるためには他国の言葉を理解する必要があるため、日常会話ができる程度の語学の習</p>	